



安城家の滅失(櫻の園)

南海部 覚悟

「一体どういうことなのよ！ちゃんと説明して頂戴！」

「ですから奥様、電力会社から受電契約を解約したいって……。」

「電気料金、払ってなかったの？滞納していたの？」

「違います、電気代は口座引き落としで毎月きちんと払っています。電力会社のほうから、営業を終了したいって言っているんです。」

「営業終了って——もう電気を売らない、供給しないってこと？」

「そうです、事業を中止して、廃業するそうです。」

「——どしてそんな。」

「お金に価値がないから、会社を維持できないんですよ。今はどこの企業も同じです。」

「企業の廃業が続いてるってことは、信州のサナトリウムでも聞いていたけど……それで、今日から電気が使えなくなるの？」

「——出入りの電気屋さんに頼みました。自家発電の機械、いま設置して貰っています。」

「出入りの電気屋さんって……あの松下さん？」

部屋のドアがノックされて、僅かな隙間から声がしました。

「松下です、設置終わりました——ああ、奥さまご無沙汰しています、もうお体大丈夫なんですか？」

ブルーグレーの作業服を着た初老の男が、部屋のドアの向こうから顔を覗かせています。

「お陰様でもう大丈夫よ、松下さんには何時もお手数掛けますねえ……。」

「とんでもありません、先々代からずっとお世話になりっぱなしで……こんな時こそ恩返ししないと、罰が当たります。」

「松下さんなら、きれいに説明してくれるんじゃないかしら、どうして電力会社が廃業することになったの？」

「電力会社だけじゃありません、ガス会社も、石油元売りも、メーカー、小売り、サービス、あらゆる企業すべていけません。資金は幾らでもあるのに、価値が無いから稼働してないんです。」

「奥様は、ずっと高原のサナトリウムで過ごされてきましたから、きっと下界の情報が希薄でいらしたんだと思います、奥様が入院されていた3年間で、世の中まるで変わってしまいましたわ。」

「どう変わったの、本田さん？」

本田と呼ばれた家政婦は、家主のリネンをまとめながら、更に続けます。

「お金を持って行っても、スーパーで商品が買えないんです。店の人に壱万円札を渡そうとしても受け取らない……ただの紙切れと同じだっていうんです。」

哀しげに、シーツで顔を覆いました。

「——じゃ、どうやって商品を買ってるの？」

「買ってるんじゃない、人の好意に甘えて頂くか、さもなければ自分で作るんです。」



「私から、詳しく説明しましょう。」

電気屋の背後から、長身を折り曲げながら、この家の執事が入ってき



ました。

「そうね、これは貴方の仕事ね、豊田さん。」

豊田と呼ばれた執事は、壁に掛かった油絵の背後の隠し金庫から、漆塗りの書類入れを持ち出し、中の証券をさし示しました。

「奥様は、これが何か分かりますか？」

「国債・・・ね？」

「日本の古い赤字国債です。4年前のある日、この債券の市場利回りが一気に跳ね上がりました、欧米の信用格付機関の評価による反動で、引き受け手が少なくなったのが原因です。」

「まあ、国債の償還利払いに一般会計の1/3以上喰われるようになりましたから、仕方のないことではあります。」

ドアの横で静かに聞いていた電気屋が、俺にも言わせろとばかりに口を挿みます。

「国債の券面利率は固定ですから、取引価格が下がることによって、市場利回りが上がります。国債利回りが上がることによって、他の市場金利も連動して上昇します、為替が円高となり、景気が下振れて税収も落ち込みます。」

「———松下さん、詳しいのね。」

家主に褒められて嬉々満面の電気屋を遮るように、執事が話を引き取ります。

「ともかく！歳入不足を恐れた政府は、臨時国会を召集して大幅な増税法案を可決しました。———3年半前のことです。」

「かねてから、消費税を国債償還に充てないことを、公約としてきた現政権は、苦し紛れに、所得税と法人税の非常識な税制改革に打って出たのです。」

電気屋がまた口を挿みます。

「所得税、法人税とも一定額の課税標準超過分に対し95%の特別加算税率を課したのです。」

窓の外から、カラスの鳴き声が聞えます。

「一定額の課税標準って、誰がどう決めるんですか？」

家政婦も身を乗り出して、興味津々質問します。

「所得税の場合扶養家族の人数、法人税の場合正社員の人数で決まるんだ、つまり扶養家族、正社員数が多いほど通常税率の課税標準の限度額が大きくなる。」

執事が得意げに教えます。

「じゃ、格差が無くなっていいことじゃないですか？」

「出生率と、正規雇用の割合が増えたのは正解だけど、一定以上の収入は殆ど税金で徴収されるから、医師、弁護士、タレント、作家、プロスポーツマン、学者といった高額所得者がいなくなった。」

「いなくなったんじゃないくて、そういった連中が仕事をしなくなったんです。ある会社は取締役会が構成できなくて、一般社員の年度持ち回りで役員が決まっているんだそうです。」

「企業の幹部は、経費で落とせない持ち出しも多いから、税引き給与が余り変わらないなら、皆やりたがらない。」

「町内会の役員みたい……。」

「高額所得者は、仕事の大半がボランティアになった——ハハハハ。」
シニカルな笑いが部屋を包みました。

「難しいことはもういいわ！それからどうなったのよ！」

家主の苛立ちの一声が、弛緩した部屋の空気を引き締め、話を本題に引き戻します。



「ある日、ネット上に3Dプリンターを使ったドル紙幣の製造プログラムが、アップロードされているのが、発見されました。」

「それが、どうしたの？」

「そのプログラムを使って試験的に製造されたドル紙幣が、どの偽造鑑定機を使っても、偽物と判定できなかったのです。」

「ここから私に説明させてください、電気屋で3Dプリンターには詳しいものですから……。」

「いいわよ、松下さん。」

「ご存知のように、3Dプリンターは物体の構造を2次元の層を重ねることで構成する成形システムです、最新のものは分子そのものを配列して、大変精密な製品を作ることが出来ます。 ネット上で発見されたプログラムは、本物のドル紙幣を精密なMRIで解析した断層データを、3Dプリンターで再現できるように処理したものでした。セルロース分子を配列して植物繊維を構成、紙幣の紙を再現し、カラーインク、磁性インク、透かし模様、ホログラフィーも素材から再現して、オリジナルの紙幣を完全にコピーします。オリジナルと分子レベルで同じものですから、どんな鑑定機もパスするわけです。」

「政府は、ドルと較べて構成が遥かに複雑な円紙幣は、流石に偽造できないだろうと高を括っていましたが、翌日見事に円紙幣のプログラムがアップされました。」

「見分けがつかないんじゃ、偽札って言えないんじゃない。」

「其処なんですよ！奥様。当然政府は特定秘密保護法の対象として取り扱ったんですが、どこからリークされて、早くも3日後位から徐々にインフレが進みました。誰でも簡単に、本物と見分けがつかない紙幣が製造できるってことが広まると、加速度的に貨幣の価値が失われて行ったのです。」

「——ちょっと待ちなさい、今はデジタル決済の時代よ、スーパーで買い物するにもカード使うでしょ、紙幣の出番なんてないじゃない。」

「電子データは、物やサービスの価値を表示するだけです。価値を媒介できるのは今でも通貨しかないんですよ、金本位制度の金と同じで、政府の信用を背景とした、単位原器のようなものです。その通貨が信用できなくなると……。」

「同じ現象は世界中に拡がっていきました、2・3日内には人民元・ユーロ・ポンド・ルーブルにも、同様なプログラムがアップされたんです。」

「政府はそれからどうしたの？」

「政府は今でも円の価値を保証しています。公務員への給与の支払いも、税金の徴収も円でやっていますが、もうそんな保証、誰も信用しません。」

「我国の場合、直前の税制改革がインフレに油を注ぎました。高額所得者が、所得税や法人税の

支払いに、このプログラムで紙幣を大量に製造して使ったと言われています。この階層の人々は、こと納税に関する犯罪に関しては、一様に罪の意識が薄いものですから。」

「あら、松下さん。我が家も先代まではその階層だったんですけど？」

「失礼しました！」

「今では、働いて収入（生活費）を得るという間接経済（貨幣経済）は姿を潜めつつあります。自分たちの必要なものは自分たちで製造準備するという直接経済（自己生産経済）が主流となりつつあります。」

「そんなこと一般の人に出来るの？」

「ですから、今朝私がお自宅の自家発電機を設置させて頂きました。」

「発電機、あなたが造ったの？松下さん！」

「あれは、マイクロリアクターと言いまして、超小型の原子炉を利用した発電機です、奥様一人だけの使用なら50年は核燃料の入れ替えなしで、発電し続けます。」

「どうやって作ったの？」

「3Dプリンターです。製造プログラムは、ネット上のフリーソフトを幾らでもダウンロードできます。」

「原材料は？」

松下が本田の方を振り返ると、家政婦は申し訳なさそうな顔で……。

「サナトリウムから帰ってこられる前に、要らないものは捨てておいてとおっしゃってましたので、大量に金属が必要になると聞いたものですから、豊田さんとも相談して、庭にあった水盤と、古いシャンデリア、2階の窓の面格子、古い調理器具、金属の食器、ロビーの銅像2体、車庫にあった古い自転車とバイク、自動車のエンジンなんかを……。」

「——い、いいのよ、みんな要らないものだから。」面格子の無い2階の窓から庭を見下ろしながら、家主の顔は多少引き攣っていました。

「提供いただいた金属に、十分な量のビスマスが含まれていましたので、核燃料として使用させて頂きました。複雑な機械で初期不良が起こるかもしれませんが、その時はまた呼んでください。」

「放射能は大丈夫なの？」

「放射能は出ません……まあ多少出ますが、気にされなくて大丈夫です。50年たって廃棄されるときは、専用の金属ケースに入れて、不燃物で出してください。といってもそのころは、私も奥様も墓の中でしょうけどね……ハハハ。」

家主の顔色を伺っていた、執事の豊田が慌てて繕います。

「先代の趣味だった、古いカメラのコレクションと、先祖代々の甲冑・兜は、取ってありますからご安心下さい。」

「気にしなくていいのよ、カメラも兜も松下さんに提出して原子炉廃棄用のケースを造ってもらいなさい、誰もいなくなったらどうすればいいか分からないでしょ。」

「それにしても、あれだけ再稼働、再稼働でガタガタしていたのに、今じゃ、一家に一台稼働してるの、原発。」

「なにせ50年間電気代タダですから、今やエネルギー自体、それ程価値のあるものではありません。」

「パニック症候群で入院して3年も世間から離れていると、とんでもないことになってしまうものね。」

「それと奥様、私たち2名も今後お給料を頂きながら、奥様にお仕えすることは叶わなくなりました、私たちにも自分たちの生活がありますので、本日でお暇することになります。」

「———そうね、給料貰っても仕方ないものね。」

「当面の生活で必要となりそうなプログラムを、カウンターの上のパソコンにダウンロードしてあります。」

「当面必要なものって？」

「主に食品です。」

「———食品もインターネットのプログラム使って、3Dプリンターで作るの！」

「そうです、米やパンはスターチパウダーを使うのが簡単です、肉や魚はまだ不完全ですがアミノ酸ペーストから作ることが出来ます。長年お世話になったお礼に、私の田舎の農家の知合いを総動員して、屋敷の裏に家庭菜園を造らせて頂きました。車庫の隣の温室には水耕栽培の棚も設けてあります。奥様一人なら、十分な量の収穫があると思います。野菜の育て方と収穫の仕方、マニュアルにしてパソコンに保存してあります。」

「水はどうするの？」

「松下さんの知合いの水道屋さんに、無理を言って浄化システムを組んでもらいました。主に雨水を利用しますが、雨が少ないときは下水を循環させて浄化します。」

「排泄物を使うってこと！」

「———水道水と全く変わりません。」

「水道屋さんには、何をお支払したの？」

家政婦の本田が答えます。

「先々代が蒐集していた古い切手のコレクション台帳を、持って帰って頂きました。好きなんですわね水道屋さん、何かあったらすぐ連絡してくれって、大喜びで帰って行きました。」

「分かったありがとう、明日から何とか一人でやってくわ……。」

「大丈夫ですよ、奥様。皇室だって先週から同じようになさってるですよ。」



その時、玄関のベルが鳴って家政婦が下階に降ります、暫らくして黒い鞆を下げた、丸メガネの紳士を伴って上がってきました。

「奥様、主治医の日立先生がお出でになりました。」

「———ああ奥様、お久しぶりです。お加減いかがでしょうか？長旅でお疲れではないでしょうか？」

「その節はお世話になりました先生、ご紹介頂いた病院からやっと帰



ってくる事が出来ました、やっぱり我が家ですわね、すっかり落ち着いてとっても調子いいんですよ。」

「それは良かった、環境の違いで、まだ落ち着かれないじゃないかと

心配しておりました。」

「今日は奥様のお薬を、お持ち頂いたようです。」

「昨日、サナトリウムから奥様のカルテが届きましたので、お届けに上がりました。サナトリウムで処方されていたのと同じ薬です。」

「それで先生、私明日からここで一人ぼっちで暮らさなければならぬようです、何かあったらどうすればいいんです？ またあの発作が襲ってきたら……。」

「その時は、私が何時でも駆けつけます。この腕バンドを常に身に付けておいて下さい、バイタルモニターです。ネット経由で私のパソコンのアラームが知らせます。」

「でもクリニックのほうが、お忙しいんじゃないですか？」

「外来の診察はもうやめました、今は余程緊急の場合か、以前からお付き合い頂いている患者さん以外対応していません。医療行為は今や全てボランティアなんですよ。」

「じゃ、主治医を持たない一般の方はどうしてるんです？ 怪我や病気で手術しないといけない場合なんかは？」

「伝手を頼って紹介された医師がオペします、勿論ボランティアです。そんな伝手の無い方は、自己責任で家族がオペすることもあるようです。ネット上に様々な手術の手順を紹介したサイトがあるようですが、とても危なっかしくて……。」

「そういえば、むかし映画で見たことがありますわ、火星に一人取り残された宇宙飛行士が、鏡を見ながら自分で自分の脇腹を手術する場面を。」

家政婦の話を受けて、B級映画好きの電気屋が嬉しそうに続けます。

「プレデターがアパートの洗面台の前で、自分の手首を手術するシーンもありました、蛍光色の血液がポタポタ落ちて……。」

「気持ちの悪い話しないの！」

「済みません……。」

「医療以上に困ってる分野がありますよ、住宅です。」

静かだった執事の豊田が、思い出したように口を開きます。

「住宅産業は、典型的な労働力集約産業で、近代工業の中で一番遅れている分野なんです、報酬を払って人を雇えないから、新築も増築・改築も閉塞状態らしいんです。」

「どうして？」

「物が大きいですからね、小さなパーツに分けて3Dプリンターで制作しても、組み立てるのにどうしても人手がいるんです。」

「巨大な3Dプリンター造ればいいじゃない？」

「それを組み立てるのにも人手を要します。」

また、電気屋の松下が口を挿みます。

「住宅そのものの考え方を、変える必要があるんじゃないかと思います。」

「どういう風に？」

「家族全員で住むのじゃなくて、一人に一戸、カプセルの中に住宅設備を集約して……。」

「———蓑虫みたい。」

「でも、豊田さん、こんなこと何時まで続くのかしら。とても長くは続かないと思うけど・・・
・政府も偽造されない通貨を早く作ればいいのに。」

「物を正確にコピーする技術は、今や極まっています。本物と偽物を判別することはもはや困難です。それに、今の経済が本来の姿だっていう学者もいます。」

「何で！」

「たとえば奥様、高級ブランドのバッグがどうしても欲しい場合、どうされます？」

「お店に行って、小切手を切って買って来るわ。」

「一般の方の話ですよ、まずは会社で必死で働いて、お金を貯めて買って来るか、ローンを組んで借金するでしょう。つまり、バックとは関係のない経済行為が先行するわけです。これを間接経済（貨幣経済）と言います。」

「お金がなければ仕方ないじゃない。」

「欲しいバッグを直接自分で作ればいいんですよ。ネット上には様々なブランドバックの、制作プログラムがアップされています、古い自分のバックを正確に解体分別して、レーザーを使った改質機にかければ、3Dプリンターが使う原材料になります。

自分自身で必要な物を準備・制作するんです。これを、直接経済（自己生産経済）と言います。」

「だってそんなもの、ブランドバックと違うじゃない！」

「品質・デザインとも寸分違わない品物です。そもそも、有名メーカーが排他的に製造するブランド品を、一般の市民が無形の価値の為に、長い労働時間を費やして手に入れる必要があるのか、という議論は昔からありました。かつては、値段の差に応じて品質やデザインの差がありましたが、現代の複製技術では、その差は現実に存在しません。」

「でもね豊田さん、専門の職人さんがコツコツ作ったものが欲しいの、自分が作った品物なんて使う気がしないわ、女はみんなそうなの！」

「——それは、よく分かりませんが。」



「ブランド品より、もっと良いものが創れるかもしれませんよ。」
お喋りの電気屋が、また口をは挿みます。

「メーカーの品質やデザインは、多くの場合生産技術とコストに縛られます、特に大量生産品ですと、作業工程の数が決定的な拘束因子になります。3Dプリンターの場合、一体で成形しますのでそれは問題になりません。」

「例えば？」

「例えば、電気製品の裏側を見ると、複数の小さなビスで裏蓋を固定しています、今や電気製品は殆ど使い捨てですから、使う方からすれば必要のないビスと裏蓋ですが、生産技術としては、本体を組み立てるのにどうしても必要です。3Dプリンターで作れば部品を固定するビスをも含めて、全て排除できます。船の錨の巨大な鑄鉄製の鎖がありますが、どうやって鑄造するかご存知ですか？ あれは、まず偶数番の環を

先に鑄造して、その環を奇数番の鑄型に組み込んで鑄造するんです。3Dプリンターなら、偶数番も奇数番も同時に製造できます。」

「品質やデザインの自由度が、遥かに広がるってこと？」

「ご名答、流石奥様！」

陽が西に傾いて、2階の窓を吹き通す風に、冷たさが増しました。家政婦が白い上げ下げ窓を順に閉めて廻ります。

「最後に奥様、これをお受け取りください。」

そう言って執事が渡した皮の袋の中身は、ずっしりと重量がありました。

「な、なにこれ！ピストル!?——こんな物持ってたら逮捕されるじゃないの！」

「今国会で、護身用小火器所持に関する改正法案が審議中です、間もなく可決されるでしょう。今後はご自分の身の安全も、自己責任で守って行かなければなりません、それは、先週私が3Dプリンターで制作した銃です、試し撃ちも終わっていますので、安心してお持ちください。」

「嫌だこんな社会！もう誰も守ってくれないの！」

「誰が、どんな武器を持っているか分かりません、攻撃に対しては確実に反撃されます。あれだけ蔓延っていた反社会的勢力も、今は殆ど解散してしまいました。」

「日本人が武器を持たないといけないなんて、偽造プログラムをアップロードした人間は随分な大罪ね。」

「それが、そうも言えません。」

「どうして？貨幣を失ったことは、日本人のみならず世界中の人々にとって、とんでもなく不幸なことでは？」

「その貨幣の為に、物を所有する欲望が生まれ、常に働くことを求められ、物を所有した途端、新しい製品が販売されて、また更に働くことになる……。」

「企業やメーカーが造る製品は、価値を償却すれば殆ど廃棄されていきましたから、必死で働いて稼いだ資金を、焼却して捨てるのと同じです。今は、新しい品物を作るためには、材料を得るため古い品物を潰さなければならない、山に行って原料を採掘する訳ではありませんから、需要を見込んで過剰に造ることもありません。」

「今の方が、いいって言うの？」

寡黙だった医師の日立が、徐に口を開きます。

「こうなったのも、万人の意志かもしれませんが。巨大な社会のシステムにどっぷりと浸かり、ひとつの小さな歯車に甘んじる個人に、人々は嫌気がさしたんだと思います。——大金持や巨大企業の犯罪・失策による損失を、なんで自分たちの税金で穴埋めしなければならない。例外もなく、組織の意思が個人のそれに優先する。事業の収益の配分は、常に所有する資産に比例する。俺が徹夜して働いた成果で、俺より10倍儲ける奴がいる——。そんな不満を背景に、国を含めたあらゆる組織の信用が、瓦解しつつあります。どんな新しい通貨を発行するにしても、信用の無い組織では、円と同じように機能させるのは無理でしょうね。人は一人では生きていけないと言いますが、その言葉は技術の進展に伴い、少しずつ過去のものとなりつつあります。」

「自分の面倒は、今では本当に自分で看れるようになったんだから、他人に頼らず自分だけで生きて行きなさいってこと……何だか、哀しいわね。」

「人間は、貨幣経済によって、社会的分業のもと、相互に他人の生産に依存して生きてきました。でも、そのことは人類の歴史からすると、そんなに長い話じゃないんです、日本最古の通貨でも、約1,300年の歴史に過ぎないんですよ。それ以前は、ずっと自己生産的な社会だったと思われれます。金を払うことによって、より高度な他人の技術を手に入れることが出来ます、でも同時に他人の考え方、ビジョン、ルールをも受け入れることになるんです。誰にも束縛されない自由な人々の応答は、1,300年前のその時代から、失われ始めたのかもしれませんが。」

「そうね、自分で自分の需要を全て満たせるなら、他人や組織に従うことも無いし、ルールに縛られて、身を律することも無いものね……でも、お金が充分あるんなら、貨幣経済の下でも同様な自由を享受できるんじゃないの？」

「それは、頂点の一部の階層だけです、直接経済（自己生産経済）を実現する様々な科学技術は、長い間その階層に独占されてきました、この十数年でそれらの技術が、一般に開放されつつあるのです。」

「——一日立先生、裕福なお医者さんでいらっしゃるのに、随分リベラルなのね。」

長くなった晩春の陽も、やがて西の山塊の縁に到達し、電気屋と医師が、家主に丁重な別れの挨拶をして帰って行きました。

この家に住み続けた3人が残されました。

「豊田さんに、本田さん、もうお別れね。長い間本当にありがとう、お礼にこの屋敷にあるもの、何でもいいから好きな物持って帰って……。」

「そんな奥様、お給料もきちんと頂いていますし、退職の一時金も思ってもいない金額で……。」

「そのお金が、価値が無いんでしょ。だったらお礼にならないじゃない、あなたたちに私の気持ちを伝えたいの、ここにあるものしかあげられないけど、ほら、好きなもの言って!？」
視線をじっと下げていた家政婦が、急に顔を上げると、もじもじと呟きました。

「だったら奥様、あのティアラを……。」

「ハップバーンのティアラ、ローマの休日使ったものね。」

「私は、棟方志功の……。」

「板画ね、釈迦十大弟子。前から欲しいって言ってたわね。」

夜の惜帳が屋敷を包みこみ、惜別の時間が無情に過ぎ去ります。

玄関ポーチまで見送りに出た家主の耳に、家政婦が何やらそっと呟きます。

ポーチの照明に照らされ、庭の正面の池の水が、水盤を失った噴水の穏やかな水の流れを水面に煌めかせて、贖いようのない哀しさをも癒そうと、健気に水音をたてています。

「奥様に何を耳打ちしたんだい？」

車寄せから続く白砂のアプローチを、庭園灯を頼りに歩きながら、豊田が本田に尋ねます。

「月に2・3回は、奥様の話し相手ににお伺いしますって……ずっと黙って過ごされるなんて

、お可哀相だと思って。」

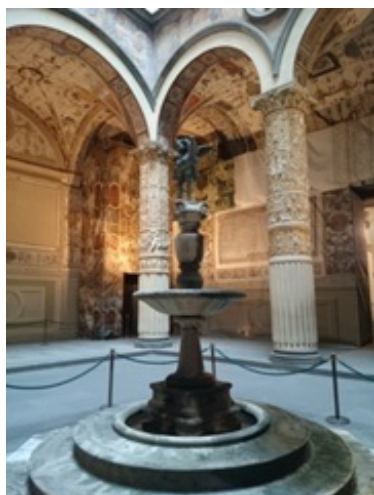
「そしたら？」

「月2・3回じゃ待ちきれないわ、毎晩携帯に電話するかもしれないって……。」

「お子様もないし、先代が亡くなってからは、ずっと一人だからね、我々二人が頼りだったんだ、まあ何とか愚痴を聞いてやってくれ、私も近くに来たときは必ず顔を出す様にするから。」

「気分晴らしに、長い旅行でもお出になればいいのに……。」

「飛行機も、列車も船も、今は自分で調達しなければならない。サポートする旅行会社もないから、しょせん無理な話だね。」



阪急電鉄甲陽園駅より北、山陽新幹線六甲トンネルが直下を貫く山裾、鬱蒼とした木立に囲まれて、その古びた洋館は周囲の緑に溶け込むように佇んでいました。

鋳鉄製アールヌーボーの巨大な門扉の袂には、「安城」と描かれた表札があります。

名残惜しそうに門扉を閉めた二人は、歩道の脇の並木を見上げました。

「知ってるかい、この並木？」

「何ですか？」

「この界隈で、唯一の桜並木なんだ、毎年春には見事な桜色の天蓋が歩道を蔽う。だから近所の人、この屋敷のことを尊敬を籠めて、櫻の園て言うんだ。」

「知ってますわ、でも何でしょう、あれ？」

そういつて指差したその先を見上げると、先端にこんもりと、季節外れの桜花を瑞々しく湛えた小枝があります。

「どうしたんだろうこんな時期に？老木の末期の狂い咲だろうか？」

細かい霧雨が、レンガ色の歩道をしとしと濡らし始めました、街路灯の光芒が雨に滲んで小枝を照らします。

やがて、晩春の夜風が桜の小枝を優しく揺らし始めました。

ハッとして、屋敷を振り返ったその刹那――。

一発の銃声が周囲の闇を切り裂き、一陣の花吹雪が雨の夜道に舞いました。

おわり

アントン・チャーホフと吉村公三郎に敬意を表して。

以上、フィクションです。

安城家の滅失（櫻の園）

<http://p.booklog.jp/book/107783>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107783>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107783>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ